

## 職場で民医連新聞をもっと活用しよう!

毎月第1、第3月曜日に発行される民医連新聞は、全国の民医連の県連、法人、各事業所で取り組まれている日々の活動の中から、全国に経験と教訓として広げたい内容にあふれています。1月23日号には香川から発信した2つの記事が掲載されています。ぜひご一読ください。

県連・法人の委員会、各事業所の活動や職員としての思い、民医連新聞を読んだ感想などをメールで投稿しよう  
送付先は

min-shinbun@min-iren.gr.jp

。掲載されると1000円の粗品がプレゼントされます。

## 6面「診察室から」伊藤翔吾先生(高松平和病院 医局)

香川県にある高松平和病院で初期研修をしています。

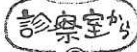
先日、当院でCPCが開催され上級医の協力のもと、対象となる患者Aさんの臨床経過について整理し、発表しました。CPCとは臨床病理検討会のこと、患者の死後に病理解剖を実施し、それをもとに臨床医と病理医の間で情報の「すりあわせ」をすることで、診断・治療の妥当性を吟味するものです。

Aさんは、当院緩和ケア病棟に入院していた患者です。詳細は伏せませんが、臨床経過の整理の過程で、治療にかかわった先生たちから紹介状という形で情報を教えてもらい、時には直接話を聞かせてもらうことで、現疾患について多くの知識を得ることができました。特に当日は、病理解剖の結果やその周辺知識について、病理の先生から学び、亡くなる前にはわからなかった病態や疾患を発見することができ、非常に含蓄のあるCPCになったと思っています。そもそも、今回の病理解剖・CPCは、Aさん本人の「誰かの役

### 未来の患者を救う手がかかり

に立ちたい」という意思にもとづくものでした。本当にその意思がかなえられたかはわかりませんが、少なくとも私自身にとって、病理解剖に立ち会うことができた上に、今まで知らなかったような病態について学ぶこともできました。今後の医師人生において大きな糧となったと感じています。また、病理解剖・CPCの準備にかかわらなかった人にとっても、これらの内容を聞いたり読んだりすることによって、新たな知見を得ることができると思っています。このCPCから得られた知識を我われ医療従事者が生かすことで、いまだ出会ってすらいない、未来の患者を救う手がかかりの一つとなる可能性も秘めていると考えています。

まだまだ病理解剖には抵抗感のある患者、医療従事者が多いとは思いますが、死後の選択肢のひとつとして患者さんに提案することも、医師をはじめとした医療従事者の責務なのかもしれないと感じました。(伊藤翔吾、香川・高松平和病院、初期研修医1年目)



## 5面「北から南から」川田晴美さん(県連事務局)

### 『被爆者の証言を聞く』～新入職員後期研修

【香川発】新入職員の後期研修のテーマは、私たちが働く職場のルーツを探る「平和」編。サブテーマは「被爆者といっしょに平和な社会をめざそう」で、昨年12月、広島で被爆した人と、被爆2世の2人に話を聞きました。

広島で被爆した人は現在93歳。16歳の時に被爆しました。自分の体験は長い間話すことはなかったそうです。しかし、毎朝小学校に通う子どもたちの姿を見ているうち「この子どもたちには大人になる権利がある。平和でないとその権利を奪ってしまう」という思いから体験を語り始めました。

倒壊した建物から光をたよりに外に出たこと、鎖骨あたりの傷から2メートル先まで血が噴き出したことなどを生々しく語り、「私たちの力は小さいが無力ではない」という意味の「微風千里」との言葉で締めくくりました。

この日は地元テレビ局が被爆者の語り部活動の取材に。翌日放映され、二度とへり返してはいけないという思いが、より強まった」との職員のコメントも紹介されました。(川田晴美、事務)